

平成28年 青年国際交流事業の効果検証に関する検討会（第1回）議事概要

1 日 時：平成28年2月12日（金）15:00～17:00

2 場 所：中央合同庁舎第8号館8階中会議室

3 出席者：

（委員）牟田座長、池上委員、井上委員、ERIKO委員、竹尾委員、
（内閣府）安田内閣府青年国際交流担当室長、田中参事官（総括担当）、
金原参事官補佐（青年国際交流担当）

（オブザーバー）

日本青年国際交流機構副会長 大橋玲子氏

4 概要：

○田中参事官 それでは、本日はお忙しいところ、御足労いただきまして、誠にありがとうございます。

定刻となりましたので、「平成28年青年国際交流事業の効果検証に関する検討会第1回」を開催いたします。

私は、共生社会の総括参事官の田中でございます。担当参事官は、今、船に乗ってインド、スリランカへ行っているところでございますので、今日は代わりに務めさせていただきます。

最初に、青年国際交流担当審議官の安田から挨拶をさせていただきます。

○安田室長 大臣官房審議官で、青年国際交流を担当しております安田でございます。

皆様方には、御多忙の中、本検討会の委員をお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。

皆様も御案内のとおりですが、この数年間、青年国際交流事業につきましては、外部からの御指摘も踏まえまして、たびたびの見直しを行ってまいりました。本日御出席の委員の方々の中には、今までの見直しに御協力をいただいた方もいらっしゃるわけでございます。

この見直しに基づきまして、一時期、この旧世界青年の船の事業につきましても、外国への航行が困難な時期もありましたけれども、本年度はおかげさまをもちまして、1カ月を超える船上研修と、インド、スリランカ、外国への寄港も行うという次世代のグローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」を実施することができております。

現在、事業は実施中で、1月27日に出港し、今、インドへの寄港を終わりました、スリランカに向かっているところでございます。

この事業を含めまして、国際交流事業を効果的に実施し、事業の目的でございます青年リーダーの育成、そして、我が国と諸外国との特に青年達の交流を通じての関係強化に資

するために、これまで行ってきた事業の評価を適切に行っていただき、改善点については速やかに反映させるべく、PDCAサイクルを適切に進めて参るということが重要であると考
えております。

この検討会におきましては、次世代グローバルリーダー事業を中心といたしまして、平
成27年度の国際交流事業について忌憚のない検証をいただくとともに、今後のプログラム
や適切な効果測定、その指標のあり方につきましても御議論いただきたいと考えていると
ころでございます。

今回、さまざまな分野から、豊富な知識、経験を有する方々に御参加をいただきまして、
大変ありがたく思います。ぜひ、この青年国際交流事業の評価を客観的な目線から検証を
していただくとともに、さらに充実した内容となりますよう、引き続きお知恵を貸してい
ただきますようお願いを申し上げます。冒頭の挨拶とさせていただきます。よろしくど
うぞお願いいたします。

○田中参事官 続きまして、本検討会の委員の方々を五十音順に御紹介させていただきます。

まず、日本大学教授の池上清子委員です。

○池上委員 池上です。よろしくお願ひいたします。

○田中参事官 日本経済団体連合会教育・スポーツ推進本部長の井上洋委員です。

○井上委員 井上です。よろしくお願ひします。

○田中参事官 モデル・定住旅行家のERIKO委員です。

○ERIKO委員 よろしくお願ひします。

○田中参事官 明治学院大学国際学部長の竹尾茂樹委員です。

○竹尾委員 竹尾でございます。よろしくお願ひします。

○田中参事官 東京工業大学名誉教授の牟田博光委員です。

○牟田座長 牟田でございます。よろしくお願ひします。

○田中参事官 以上でございますが、本検討委員会には、内閣府青年国際交流事業の参加
青年の活動組織であります日本青年国際交流機構より、オブザーバーとして出席いただい
ております。副会長の大橋玲子さんです。

○大橋副会長 よろしくお願ひいたします。

○田中参事官 それから、今日は事務局に補佐の金原が座っておりますので、よろしくお
願ひいたします。

○金原補佐 よろしくお願ひします。金原です。

○田中参事官 さて、お手元にお配りしている青年国際交流事業の効果検証に関する検討
会の開催決定におきましては、本検討会の座長は統括官が指名して依頼するとなっております。
これによりまして、座長につきましては牟田委員にお願いしたいと存じますが、よ
ろしいでしょうか。

(拍手起こる)

○田中参事官 それでは、これから議事に入らせていただきたいと思います。

以降の進行につきましては、座長の牟田先生にお願いすることにしております。それでは、よろしくお願いいたします。

○牟田座長 御指名でございますので、今回、座長を務めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

審議官からもお話がございましたように、数年前に外部からいろいろと御指摘をいただきましたけれども、一番大きな御指摘は、これまで評価がなかったということで、効果があると言っているけれども、わからぬではないかということだったと思います。そういう点で、実際に評価をしてみて、このように効果があるのだということで、今、審議官のお話がございましたように、ほぼ昔のような形に戻ることができたのかなと思います。

ただ、こういうことは一度やればよいというものではありませんで、毎年続けて、そして改善のできないようなプロジェクトというのはいり得ないわけで、時代が変わりましたら、やはりやり方も変わっていくのだらうと思いますが、毎年毎年こういう評価をやって評価の結果を積み重ね、そして評価の結果に基づいて改善をしていく、こういう努力をしていくことが、いいプロジェクトを長く続けていく一番大事な点ではないのかなと思っております。

私ども、微力ではございますが、それにお役に立てればこんなにうれしいことはないと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、ここから座長として進行を務めさせていただきます。

議事に入ります。まず、この検討会の開催の趣旨と運営などにつきまして、資料に沿いまして事務局から説明をしてもらいます。よろしくお願いいたします。

○金原参事官補佐 まず、資料の確認をさせていただきます。

こちら、平成28年青年国際交流事業の効果検証に関する検討会議事次第が1枚目についてある資料でございますが、おめくりいただくと、資料一覧があるかと思います。

資料1が来年度の予定でございますが、内閣府の青年国際交流事業の概要でございます。

資料2が、本年度の次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の概要で、御存じかと思いますが、こちらが平成25年度以降、特に見直しの対象となった事業でございます。

資料3が、次世代グローバルリーダー事業について、本年度の事業と昨年度の事業の違いを御説明する資料でございます。昨年度の効果検証に関する検討会において御指摘いただいた事項をもとに、本年、どのような改善を行ったかについて記載をしております。

資料4が、本年度の事業と昨年度の事業を比較したもう一つの資料でございますが、参加青年の多様性という観点から、本年度と昨年度の事業を比較した資料です。

資料5が、次世代グローバルリーダー事業以外の本年度実施済みの青年国際交流事業の概要を御説明した資料です。

続きまして、もう一つのクリップ留めの束があるかと思いますが、参考資料でございま

す。

参考資料1は、内閣府の次世代グローバルリーダー事業と民間団体による類似の主な青年国際交流事業との比較をお示しした資料です。

参考2は、昨年の効果検証に関する検討会の報告書の概要でございます。

参考3は、今年度の次世代グローバルリーダー事業参加青年に対する日本人参加青年用の事前のアンケート、参考4が日本人参加青年用の事後のアンケートでございます。

参考5は、本年度の次世代グローバルリーダー事業の全参加青年に対する事後のアンケートです。

参考3と参考4の日本人青年用のアンケートにつきましては、事業が日本人参加青年のコミュニケーション能力ですとか異文化対応力にどのような効果があるかということについて調べるための資料でございます。

参加後のアンケートは、全参加青年に対して、この事業の各プログラムの評価を問うアンケートでございます。

参考6におつけしておりますのが、昨年度のグローバル・ユース・リーダー育成事業に参加した青年に対して1年後のフォローアップをするということで、現在行っているアンケートでございます。こちらは現在実施中でございます。

資料に不足がございましたら、おっしゃっていただければ幸いです。

○田中参事官 続きまして、この検討会の趣旨などについて簡単に説明させていただきます。

先ほど牟田座長からもお話がありましたように、過去には内閣府の青年国際交流事業につきまして、さまざまな御指摘を頂いております。特に世界青年の船、現在、次世代グローバルリーダー事業として実施されている事業でございますけれども、行政事業レビューなどにおきまして、効果測定、検証をしっかりと行いながら、事業の見直し、改善を図る必要がある、こういう指摘がされております。

こうした中で、平成24年、25年、26年と3カ年ですけれども、海外への運航ではなく、国内のみの運航としておまして、平成26年に効果測定、評価に関する調査研究を行い、過去の事業への参加者に対するアンケート調査、ヒアリングを実施しております。その上で、事業の効果、今後の課題について御検討をいただきまして、報告書をまとめていただいたところでございます。

この検討を経まして、平成27年度より、海外渡航を含む1カ月程度の備船研修を含むグローバルリーダー事業が実現したということでございます。

一方、平成27年におきましては、26年度に実施しましたグローバル事業についての効果検証を行っていただき、効果検証の方向性や今後の事業のあり方に関する意見をいただいたところです。

今年度の事業につきましては、頂いた御意見を踏まえ、資料3にお示ししているようにプログラムの改善を図ったほか、現在、昨年度の事業参加青年に対し、フォローアップの

アンケート調査を行っているところであります。

本年の検討会におきましては、引き続き、特にグローバルリーダー事業に関しまして、事業のプログラムの内容や効果検証の方向性について御議論いただきたいと考えております。

また、民間団体においてもさまざまな国際交流事業やリーダー育成のための事業を行っている中で、内閣府において事業を行う意味についても御検討いただければと考えております。

以上が簡単な経緯ということでございます。

続きまして、お手元の資料について簡単に御説明をいたします。

まず、「平成28年青年国際交流事業の効果検証に関する検討会の開催について」とある紙をごらんいただきたいと思います。

1の「趣旨」につきましては、ただいま申し上げたとおりでございます。27年度事業の効果検証ということになります。

構成員、座長の選任等につきましては、先ほど御説明したとおりでございます。

3の「検討会の公開について」ですけれども、(1)～(3)まででございますように、検討は非公開とした上で、議事要旨につきましては、(2)にあるように、会議終了後、速やかに公開する。議事録については、(3)のとおり、御確認をいただいた上で公表するということにいたしたいと思っております。

庶務、その他、必要な事項については、座長が定めるということでございます。

ここまでの説明は以上でございます。

○牟田座長 ありがとうございます。

ただいまの事務局からの説明に対しまして、御質問・御意見等はございますでしょうか。

よろしゅうございますか。それでは、議事要旨の扱い等、事務局の説明のとおりでよろしゅうございましょうか。

ありがとうございます。

それでは、次の議題でございますが、内閣府で実施する予定の平成28年度青年国際交流事業につきまして、事務局で整理をしておりますので、まず、事務局から説明をさせていただきます。

○田中参事官 引き続きお手元の資料をご覧いただきたいと思います。

資料1「内閣府青年国際交流事業」の概要でございますけれども、平成28年度につきましても、前年とほぼ同じ事業を予定しております。

次世代グローバルリーダー事業については、27年度と同様、日本青年を120人、海外10カ国の青年120人の参加を得て、1カ月を超える傭船研修を予定しております。

続きまして、資料2をご覧いただきたいと思います。平成27年度次世代グローバルリーダー事業の概要でございます。

本年度の次世代グローバルリーダー事業につきましては、国際社会・地域社会でグロー

バル化の対応を牽引・指導する次世代リーダーが必要であるという認識のもとで行っているところでもあります。

具体的なプログラムとしましては、世界各国から集まった外国青年と、ディスカッションや文化交流、有識者によるセミナー、参加青年による自主活動、ワークショップなどを実施しているところです。

1月27日に出港いたしまして、インド、スリランカを訪問して、2月末に帰国する予定でございます。

続いて、資料3をご覧いただきたいと思います。平成26年度の事業との違いを説明したものでございます。

平成27年度につきましては、洋上研修の期間を34日間に延長して、海外2カ国への船での訪問を含む日程により、事業を実施しております。

平成27年の検討会の報告書を踏まえまして、参加青年の自主性の尊重、カリキュラムの改善による各種プログラムの相乗効果の拡大を図っております。

それから、経済的理由により事業に参加できない青年を対象とした参加費免除枠を導入しております。

さらに1枚めくっていただきまして、資料4でございます。グローバルリーダー事業における多様性の拡大という資料でございますが、平成27年の検討会の報告書では、日本人参加青年についても多様なバックグラウンドを持った青年たちが集まることが望ましいという指摘をいただいております。本年度の事業につきましては、地方出身者の割合を増加させることができっております。

背景としましては、広報に努めたことのほか、免除枠の設定もあるのではないかと見ております。

続きまして、資料5をご覧ください。実施済事業の概要でございますが、次世代グローバルリーダー事業以外の事業につきましては、ほとんどが実施済でございます。各事業におきまして、外国青年とのディスカッションプログラムや文化交流等のプログラムを実施しております。

また、東南アジア青年の船や青年育成交流事業については、皇族への表敬等を行う機会があったほか、国際青年育成交流事業のうち2カ国の訪問において大統領等への表敬も実現しております。そのほかも、政府要人等への面会が実現しているところです。

コアリーダープログラムにつきましては、高齢者分野、障害者分野、青少年分野の社会活動に携わる青年を欧州参加国に派遣するというところでございまして、今後、これらの国からの青年の招聘が行われるということになります。

最後に参考資料でございますけれども、まず、グローバルリーダー事業と民間団体の事業との比較の資料でございます。参考1であります。

近年は、民間団体においても国際交流事業やリーダー育成のための事業が行われておりまして、代表的な例をこの資料でお示ししております。グローバルリーダー事業を初めと

する青年国際交流事業について、引き続き内閣府において実施する意味が問われておりますので、その点について御検討いただく際の参考としていただければと存じます。

続いて参考2でございますけれども、昨年の報告書の概要になります。

最後に参考3～6でございますけれども、参考3と4は日本人青年に対するアンケートでございます。内容としましては、参加する上での目標、コミュニケーション能力や異文化対応能力、チャレンジ精神などの事業を通じて成長させるべき能力、それから、海外での就業や地域での活動について、事業前と事業後について、参加青年の意識を聞くことで、事業が成長に与える影響について検討をしていくものでございます。

参考5ですけれども、こちらは外国青年も含めた全参加青年へのアンケートでございます。事業が違う国の青年同士の相互理解に役立つか、あるいは青年自らの能力の向上に役立ったかといったことを問うているほか、実施期間中のそれぞれのプログラムについて評価を求めています。

最後に参考6ですけれども、グローバル・ユース・リーダー事業参加青年に向けた1年後のフォローアップのアンケートでございます。事業に参加した青年が、1年後に事業をきっかけとしてどのような事後活動に参加したのか。終了後、どのように能力向上に取り組んでいるのか、人生やキャリアへの影響、ほかの参加青年との交流の継続の状況などを尋ねるものであります。

今回の第1回検討会につきましては、特にグローバルリーダー事業について、今年度の事業の内容について御議論いただくとともに、効果をどのような点に着目して検討するか、また、内閣府において事業を実施していく意義についても御意見をいただければと考えております。いただいた御意見を踏まえて、参加青年に対するアンケートの結果の取りまとめを行ってまいりたいと考えております。

以上でございます。

○牟田座長 ありがとうございます。

ただいまの事務局からの御説明に対しまして、何か御質問等がございましたら御発言いただきたいと思います。

よろしゅうございますか。それでは、ただいまの説明を踏まえまして、意見交換に移りたいと思います。今回は第1回でございますので、最初に、順番に各委員から御意見を賜りたいと思います。時間の関係もでございますので、大変恐縮ですが、お一人5分以内で御発言をいただいて、まだそれでも十分に時間がございますので、一通り御意見を伺った後に自由にディスカッションするという形でやらせていただければと思います。

それでは、あいうえお順ということで、池上委員から最初に口火を切っていただければ。

○池上委員 池上です。

5分ということなので、大まかに5点申し上げたいと思います。

最初は、国益に合致しているかどうかの議論だと思います。青年育成のための交流事業というのは、今、ODAが減っている、日本の経済的な影響もあると思うのですけれども、中

で、特に国益ということがODAの関連で言われていますが、それをもうちょっと草の根レベルに落として、一人一人がコミュニティを代表するような形で、一人一人が海外の青年と、自分をさらけ出しながら、自分というものを通して日本を知ってもらおうという意味では、国益を補完して余りあるものがあるのではないかと考えています。

ですから、内閣府が実施するという意味では、大きな視点から、マクロの視点から申し上げれば、多分、ODAの補完という意味では非常に効果があるのではないかと考えます。日本という国を理解してもらおう意味で、大きな効果があると考えています。

第2点ですが、平成28年度のプログラムにぜひ入れていただきたいというリクエストです。それは、昨年9月に国連で採択されました持続可能な開発目標、サステナブル・デベロップメント・ゴールズ、SDGsという開発枠組みが決まりまして、本年1月1日から実施されています。今回のSDGsは開発目標と言われてはいますが、それは開発途上国だけが対象になっているのではなくて、先進国も開発途上国も当事者になります。ですので、今度は日本版SDGsをつくらなければならないという差し迫った状況に、今、日本は置かれているわけなのですが、これがなかなか一般に御理解されていない感じがしなくはありません。

少なくとも今年度というか、平成28年度のプログラムの中では、先進国も途上国も共通した枠組み、しかも、それぞれの国がどういう形のプログラムをとりつつ、このSDGsに取り組むかということが問われていますので、これはかなりの時間を割いて、プログラムの中で議論していただく必要がありそうです。この議論は共通したグローバルな枠組みについて、若い人たちが何を考えていて、何をしようとしているのかというところが問われてくる問題ですので、ぜひプログラムに入れていただきたいと考えています。これが第2点です。

第3点は、先ほど田中さんのご説明の中に、平成27年の評価がフィードバックされたとありました。自主性の向上を目指したということなのですが、具体的にどういうプログラムの変更があって自主性の向上を目指されたのかということが重要になります。これがどのぐらいインパクトがあって、よかったのか、悪かったのかというのは、本年度、平成27年度、今、インドからスリランカで動いている青年たちのフォローアップのアンケートを見てみないとわからないと思いますけれども、どういう点を特に重視して変更されたのかというところを教えてくださいたいと思いました。これは質問です。

第4点目です。参考資料6の関連です。フォローアップのアンケート調査の中に、グローバル・ユース・リーダー育成事業というプログラムに参加青年がどこで知ったのか、どういう理由で参加しようとしたのかということのを改めて入れていただくと、情報としては分析しやすくてよいかと思っただけです。それは、評価をするときに広報の活動のどこが効いていたのか、どこが無駄なく広報されて効果があったのかということがわかりやすいかなと思っただけです。

最後、5点目ですけれども、参考資料1でいろいろ比較をされている部分です。参考資

料1で、グローバル・ユース・リーダーの事業に関しては、参加者の範囲が18～30歳になっています。東南アジア青年の船も同じ18～30歳なのですが、国連の場合には35歳までがユースと定義されています。ユースといったときに、例えばWHOだったら25歳までとか、いろいろな定義があるのですね。ですから、もう少し年齢を広げてもいいのかどうか、または30歳というところで区切ったほうがいいのかという点を私たちの中で議論をしてもいいかなと思ったのです。

その理由は、ただ単に国連が35歳までと言っているということではなくて、参加者はなるべく社会人の方に入っていただきたいと考えているからです。学生というのは、まだそれほどいろいろなことを体験・経験していない。そうすると、社会に出て仕事をしている方たちと価値観が違ったり、物の見方が違ったりする場合もあると思います。やはり各国青年も社会に出る年齢層が日本と比べてかなり低いので、途上国の青年は特に早くから仕事を始めている人が多いと思うのです。そうしますと、日本の学生さんがそのまま参加しますと、残念ながら日本は能天気な人が多いわね、みたいな印象を持たれると困るということと、やはり日本の社会を代表するということは、学生というよりも、ある意味、社会人でなければいけないというか、社会人が多いほうが良いと思っている、そういう理由からです。

以上です。

○牟田座長 ありがとうございます。

引き続きまして、井上委員、よろしくお願いします。

○井上委員 私も数点になるかと思いますが、意見を申し上げたいと思います。

毎年この会合にお呼びいただいてずっとお話ししていたことの一番重要な点は、こういう事業によって、多様性の理解とか、実際の体験ということに尽きるのです。

したがって、今回、船上での研修が34日と非常に長くなり密度が濃くなってきていると感じておりますので、この点については非常に評価ができると思います。

日本人青年が120名で、10カ国の青年が120名、国籍ベースで言うと11カ国の人間がそこに集まるわけですので、非常に多様な形で密度の濃いものができるのではないかという期待しております。

2つ目に、これもずっとお話ししてきたことですが、コミュニケーション能力の向上という日本人の青年に欠けている部分への対応として、閉鎖空間で34日間も普段つき合いない世界の人たちとコミュニケーションをとるといのは、非常にいい機会になっており、これも改善の方向性が強く出ているのではないかなという感じがします。

3つ目は、これもこれまで申し上げましたと思うのですが、やはり参加者自体の多様性です。今も池上先生からお話があったように、やはりいろいろな人に出てもらいたいということがありまして、まずは職業を持っている方、それも組織に属している人、企業ですか、もちろん地方自治体とか、そういったところに所属する方の経験値を上げることは重要なのですが、例えば生業として、これから自分が一生をかけて仕事をしていくような

仕事に就いている人ですね。芸術家、あるいは工芸の分野なのかもしれませんし、そういった世界である程度のキャリアがあって、ここで少しブレイクスルーを見つけようという人です。今回、免除という制度ができたわけですので、そういう人たちを少しスカウティングし、見つけ出してきて、積極的に組織人でない人をどんどん入れていったらどうかと思います。

私も、経団連に属しており、企業人という組織人とお付き合いしているので、見つけにくいのは確かなのですが、例えば私は昨年まで、広報誌の編集長をやっていた関係で、若い世代で写真を撮っていたり、絵画を描いていた、文学の研究をしていたりという人を見つけてエッセーを書いてもらっていました。余り大御所ではなくて、30代ぐらいの人たちを見つけてようということで、一生懸命見つけてきたのですけれども、結構いるのですね。そうした人が賞などをとったりして世に出る手前ぐらいで見つけるというのがとても重要なのですが、そういう人の参加というのがあると、多様性がさらに広がるのではないかなという感じがします。

地域的には、だいたい地方の人の割合が増えてきていますし、女性の割合も増えているということで、評価できるという感じがします。

最後ですが、これは今もやられているのかどうか、むしろお聞きしたいところなのですが、これだけ長い期間の研修事業があるということになりますと、当然終われば、皆さんいろいろな形でこのプログラムに対する評価というか、参加した意義みたいなものを振り返り確認できるのですが、リアルタイムでソーシャルネットワークを使って外部発信をし、内部のディスカッションにも使うという作業があってもいいのではないかなという感じがします。

もちろん、顔を見合わせて話をするのも重要なのですが、最近ではツイッターとかフェイスブック、あるいは写真を使ったソーシャルネットワークもあり、そういうもので、本当に新鮮だなと思ったものを写真で撮ったり、書いてもらったりして、うまくそれを外に出すと、この事業の周知にもなります。もちろん管理はすごく大変だと思います。ソーシャルネットワークというのは、ちょっとしたことですぐに炎上してしまうという問題もありますので、難しいものではあるのですが、例えば英語を共通語にしてソーシャルネットワークでリアルタイムに書き込んでもらう作業、そういったことも考えてみたらどうかと思っています。

もちろん、批判的なものの中には入ってくると思いますし、すごく悩んでしまっている人も出てくるだろうし、難しいとは思いますが、やってみてもいいと思います。

ある種、そういう書き込みが、最初から最後にかけてどういう形が変わっていったのかというのを後から分析することもできると思いますので、そのようなことも工夫をされてはいかがかと思います。

以上でございます。

○牟田座長 どうもありがとうございました。

引き続きまして、ERIKO委員からよろしく願いいたします。

○ERIKO委員 よろしく願いいたします。

私、初めて参加させていただきまして、船にも乗ったことがないので、はっきりとこれと申し上げられない部分もあるかと思いますが、この資料を見る限り、3点気づいたことがございました。

先生たちが先ほどお話しされたことと重複してしまう部分があるのですけれども、参加者の多様性というところで、私も先生たちと同じようにそこはすごく思います。私の周りでも芸術方面とかで活躍されている、例えば楽器だったり、陶芸だったり、そういうので活躍されて、自分で外に出てコミュニケーションをとっていらっしゃる方もたくさんいらして、例えばスポーツだったり、芸術だったり、語学だったり、特技が何かに特化した人を一人ずつ選出して行ってメンバーにするというのも一つかなと。それだと、たとえば言語にちょっと障害があったとしても、文化的なところで交流が持てるというところはあるかと思えます。

あと、この船上の研修についてなのですけれども、ぜひ取り入れてほしいなと思うのが、外交関係について、10カ国それぞれの国と、それに対する日本の国との関係性をぜひ学んでからというか、船に乗っている途中でもいいのですけれども、お話しする機会があったらすごくいいのではないかと思います。それは私がいろいろな土地に行きまして、私が知らない外交史というのを、本当に民間の人たちも、小学生だったり中学生でも知っているなというのをどこに行ってもすごく感じますので、それは日本だと教科書とかではなかなか学べないところかなと思います。ここは心が近づく一歩でもあると思いますので、ぜひ外交関係などは入れていただきたいと思えます。

あと、このプレゼンテーションなのですけれども、今は、例えばその国の人たちが、その国の自己紹介とかプレゼンをしているかと思うのですけれども、例えば日本の人たちが全然違う国のプレゼンをするということでもすごくおもしろいのではないかと思います。そうすると、必要に駆られて必ず調べなければいけないですし、そのプレゼンを見た国の人たちから指摘も受けられるでしょうし、また、コミュニケーションもかなり多く図れるのではないかと思います。

最後になりますが、もう一つがアウトプットですね。この船に乗られた方がネットメディアを通じて配信するというのが、すごく大切ではないかと思います。先ほど井上先生もおっしゃったように、今、すごく簡単に配信できるようになっていますし、ビデオカメラ一つでユーチューブとかにも画像、動画とかをアップできますので、せっかくそういう楽しい交流がたくさんあるかと思えますので、ビデオを一つ持たせて、そういったものを少し話させて、後で英語とかを字幕でつけたりしたらいいのかなと思います。それで次の募集をかけたときに、全然知らない、埋もれている人たちでも、すごく能力がある人たちにもアプローチができるのではないかなと思いました。

○牟田座長 ありがとうございます。

引き続きまして、竹尾委員、よろしくお願いします。

○竹尾委員 言うことが余りなくなってまいりましたけれども、評価の仕事を継続してさせていただいて、また、少しずつですが、だんだん改善されて、私たちが提案したことも取り入れてくださったりして、奨学金でないですけども、免除が10名発生して、地方の人が割かし出にくかったことが出られるようになったとか、そういうことはすばらしいと思います。

ジェンダーバランスは、どちらかという私は女性のほうが多過ぎると思っていますけれども、既に出ましたが、年齢も皆そういうこともありますけれども、更にいかに多様な若者を乗せるかというのが課題だと思います。

努力もされていますけれども、やはり一番問題なのは広報活動というか、既にSNS等々、新しいメディアも視野に入れてという御指摘がありましたけれども、私が呼ばれたので、たまには空気に触れなければと思って、最初のOPYが来たパーティーと、出港式にも行きました。たまには行かないと忘れてしまうのですね。やはり8年前と大分雰囲気が変わって、写真を撮りまくっていますね。自分たちの写真を載せるのに夢中で、どこの人たちも全てですよ。ですから、コミュニケーションよりもむしろそちらでやるほうに夢中だという感じがするのですけれども、言いたいことは、やはりこうしたテクノロジーとかメディアの変化を受けて、コミュニケーションのスピードとか質がすごく変わってきているように思います。

JPYの子たちも9月に研修を持ちますけれども、そのときに、最近ですとフェイスブックの交換とか、補完的なもので、普通ですと地方が離れたり、関係が遠いのですけれども、既に乗る前に相当親密な関係になっていますし、OPYについても何か瞬足でフェイスブック仲間になっている。それはちょっと軽いかもしれませんけれども、そういう社会関係のあり方と、この船の事業が十分追いついていない側面もあるのではないかと思います。

一番は、やはり広報とか、あるいはフィードバックというか、アウトプットという側面で、彼らは勝手に自分でフェイスブックに上げたりしていますから、ちょっと探せば見つかるのですけれども、それは一般的なものではないですね。非常にプライベートで閉じたものなのですけれども、一方で、今、募集していますけれども、オフィシャルに出しているものはやや地味目というか、ビジュアルなものはほとんどない。

もう一つは、これが内閣府の事業という側面もあるでしょうけれども、恐らく公平性ということをお考えになるでしょう。各都道府県ですとか、情報の流通についての公平性ということになりますし、私どもの大学にも来ていただいて広報もしていただきますけれども、この船だけではなくて、ほかの航空機事業とかも全部一律にやられると、学生たちにするとどれが一番おもしろいのかよくわからないのですね。いっぱいありそうだとすることはわかりますけれども、やはり先ほど来、出ていますが、場合によっては一本釣りはどうかということでしょう。それを余りやり過ぎると不公平になるとは思いますけれども、外

国青年はそういう選び方の話もかつて出たことが何度もあります。やはりロコミだったり、大きなところはせざるを得ないところがあります。そうすると、とてつもない人も来ていますね。オペラ歌手とか弁護士とか、この間も医者が乗っていましたがけれども、そのように、通常の網ではかかってこないような多様性が、むしろ外国の人たちでは実現しているところもあると思います。ですから、私は大学にいますので、大学生を乗せていただくのはとてもありがたいのですが、同時にそういう多様性をどう追及するかということが大事だと思います。

最後ですけれども、それにかかわるのですが、最近の若い人の国際交流というのも随分変化してしまっていて、皆さんよく御承知の「トビダテ留学JAPAN」ですか、この大規模なものもありますし、これについてまた言うかもしれませんけれども、実はこの間、うちの大学から珍しく一人受かったのです。それは、この世界青年の船に乗った子なのです。その後には連結して、ここで火がついて、お金が出るものがあるというので、それで行こうという形で八艘飛びのように。

国連は池上さんのほうが詳しいでしょうけれども、UNIVというアンダーグラデュエートについても学生を派遣するということがなされていて、要するに、今回も調べてくださっていますけれども、トレンドがどんどん変わっていったり、その選び方も随分洗練されていて、現地事務所からのインタビューがあって、君はウガンダに一体どういう貢献ができるのかという突っ込んだ質問を英語で30分ぐらいされて受かる。そういうこともありますので、今、起きているほかのいろいろな研修との比較とか、全部は無理ですけれども、そういうことも検証の中に入れていただけたらどうかと思います。

最後に言いますと、アンケートは、東南アジアとか、ほかの交流事業にはやっていないのですか。

○事務局 やっています。

○竹尾委員 やっていますか。私が言いたいのは、ほかの事業との関連性とか、どういう特色が違うのか。例えば航空機でドミニカ共和国に行くとか、どういう人が来て、どういうアウトプットというか、どういうものを得たのかということと、この船がどうかということも気になるので、ぜひ知りたいなど。

以上です。

○牟田座長 ありがとうございます。

一番後の私は、本当に話すことがないのですけれども、先ほどの話で、民間団体の類似の事業との比較をやりたいというお話がございました。しかし、比較をやるためには、やはり同じような調査がほかの団体の事業でできないと、結果の比較というのは、できないと思います。建前だけの比較でしたらできますけれども、そこでどのように効果が違うかということは、どこかで同じような調査をやらないと難しいのかなと思います。全部についてはできないと思うのですが、どこかの団体についてはとか、生産性なら生産性とか、ちょっと一緒にやりませんかみたいなことで似たような質問紙を配って、どう違うかとい

うことをやられれば、少しは違うのかなという気がします。

池上委員からもお話がありましたように、内閣府がやるということであれば、やはり外交上の効果といたしまししょうか、長い目で見て日本の国にどう役立ったかということがありませんと、青年が成長しましたというだけでは、やはり具合が悪いだらうと思いますね。それをいろいろな観点から調査していくということが大事なのだらうと思います。

どのようにしたらそれが出てくるかということの一環でもあると思うのですが、これも先ほどお話が出たことなのですけれども、外国人青年が一体どういう人なのか。竹尾委員からも、今、非常に多様化しているということだったのですけれども、多様化していればそれでいいのか。

あるいは言葉が悪くて誤解があると申しわけないのですけれども、やはり日本人青年の育成がメインだらうと思うのですね。もちろん外国人青年が育成されるのも結構なことだと思うのですが、どうしても日本人青年の育成に外国人青年との交流も使っているというところだらうと思うのです。そうすると、磨き砂としての外国人青年にどういうものがあるれば日本人青年がちゃんと磨けるか。磨き砂が余り立派で傷がついてしまうと困りますし、余りふにゃふにゃだと磨けないというところがあって、やはり磨き砂にもそれらしきものがあるのではないかと思うのですね。どういうものが一番いいのかというのも、アンケートか何かを工夫して上手にできると、外国人青年を募集するときに多少こういう人ということで枠でも絞れて、こちらとしてお願いしたいような方が手を挙げてくださると思います。そうでないと誰が来るかわからない。非常に多様になりましたと言って、それでいいのかと言われるとどうなのだらうなという気が少しするのかなと思いました。

私の感想は以上でございます。

というところで、皆さんの御意見を順番にいただいたのですけれども、まだ1時間近くございますので、ここからは一人ずつ意見を聞いたということで、あとは御自由に意見をいただければということでお願いします。事務局からでも結構でございますし。

○田中参事官 とりあえず、答えられるところから進めてはいかがでしょうか。

○牟田座長 では、事務局からお答えになれるところだけ答えていただいて、あとは自由に。

○金原参事官補佐 池上先生から御質問いただきました、参加青年の自主性の尊重というところですが、こちらは今回、船上研修が大きく延びたということが反映されておりまして、その中で、日本人青年と外国人青年が混在したグループで行う委員会活動というのがありますけれども、委員会活動というのはどういうことを行うかといいますと、参加青年が主催して行うセミナーのスケジュールを立てたり、企画したり、あるいはコースディスカッションやプロジェクトマネジメントセミナーといった、船内でのプログラムをどう進めるか、あるいは青年たちと講師の間でどうつなぐか、青年たちの要望を講師にどう伝えるかといった仕事をしている会なのですけれども、そういった委員会活動の回数が、前回ですと2回ぐらいしかなかったのが、船内で、プログラムを通じて4回ぐらいできる

ようになったということですか、あるいは参加青年が自主的に企画して行う自主活動の時間も設けられましたので、今年度はその時間を使って、参加青年が文化を紹介したり、特別なセミナーを行う時間を設けたりすることができたということが一つございます。

あと、コースディスカッションの中のプログラムにつきましても、参加青年の講義以外に、参加青年の間での意見交換の時間を最大限確保するようにしたところがございます。

また、こういった変更が参加青年の成長にどういった影響があるかといったことについては、帰ってきた後に参加青年の評価などを聞いて調べることになるかと思えます。

○池上委員 PYセミナーが1～3まであるのですけれども、そのことですね。

○金原参事官補佐 そうです。PYセミナーは参加青年が自主的に行うセミナーですけれども、それに加えて自主活動の時間というのもございます。リーダーシップセミナーもふえておりますし、それ以外のセミナーについても回数は増加しているところがございます。

○池上委員 それでは、レクチャーみたいな形で、座学ではなくて、もう少し対話形式の時間がふえたということですか。

○金原参事官補佐 そうですね。さらにその企画も、参加青年が取り組む機会がふえたということですね。

○池上委員 済みません、もう一つ。

参加青年がコースまたはセミナーを企画するのは、いつの段階でやっているのですか。事前の研修のときですか。

○金原参事官補佐 それについては、事前の研修もございますし、また、船内でそれぞれのセミナーが行われますので、船内での委員会活動の時間で企画する、スケジュールを立てるというのもございます。

○池上委員 始まってからそれを決められるということですね。

○金原参事官補佐 そうですね。そういった時間として委員会活動の時間を持っております。

○大橋副会長 アドバイザーの方がいらっしゃるもので、指導を受けながら。

○田中参事官 そのつもりで準備をして来ている者もいます。

○大橋副会長 発言してもよろしいでしょうか。

あと、自然発生的に集まって、イスラムとか、宗教についてみんなは全然わかっていないと。だからやるかというのと両方あるのではないかと思います。

前は、コースディスカッションのところにアドバイザーがついているというスタイルばかりしていたのですけれども、今回からは、リーダーシップ、プロジェクトマネジメント、異文化理解という部分で、リードをされるアドバイザーがつくという形になりまして、事業を横断的に見ていただくという仕組みになっています。

○池上委員 それは複数人いるわけですね。

○大橋副会長 そうですね。それぞれのセミナーの中で、最初は当然講義的なものが入る

のですけれども、後半はワークショップという形で青年中心になるという意味が、金原補佐が言われた内容になるのですけれども、あと、委員会活動といいますのは、全てのいろいろなセミナー活動、コースディスカッションもそうなのですが、必ず参加青年がチームをつくっております、その運営そのものに関して、セミナーでしたらアドバイザーの方と一緒にいきますし、コースディスカッションですとファシリテーターとともにつくり上げてリードしていくというチームができております、その部分が非常に自主的な意識を高める役割があって、前の期間が短かった国内のときよりは、そういう傾向が強くなっています。

○池上委員 どのような形で変わっているのか、帰ってきてからのアンケートが楽しみです。ありがとうございます。

○牟田座長 どうぞ。

○田中参事官 世界船の管理官で2度乗っております、御指摘のあったPYセミナーもそのときに始まったもので、回数がふえたのは非常にありがたいと思います。

船に乗る前に、ボランティア活動などを実際にして、その成果をPYセミナーの中で発表するという青年や、船の中でいろいろなディスカッションをするうちに、例えば平和についてワークショップをやってみたいとか、あるいは宗教についてやってみたいということで、企画が船の中で持ち上がることもありました。こういったプログラムが増えることで大きく自主性が伸びるのではないかと思います。

○池上委員 御経験の中で、PYセミナーの中で企画するときは、日本人の参加者だけではなくて、海外からの参加者と日本人の参加者が一緒に協働して企画をし、合同のセミナーを運営するということがあったのでしょうか。

○田中参事官 実際にございました。イスラム教についてどう考えるかとか、中東のセンシティブな問題についても話し合ってみようという青年もおりました。

○池上委員 センシティブな政治的な配慮というのは、誰かが見ているのですか。それは自然発生的だから自然に任せてという感じになったのですか。

○田中参事官 基本は任せますけれども、青年たちも、それが非常にセンシティブな問題だというのはよく分かっていますので、議論が先鋭化しないよう、青年たちも考えてやっていました。もちろん、アドバイザーや管理部でもアドバイスしながらやっています。特に、日本青年は、こういう問題を扱おうと思うが大丈夫かと相談をしてくる場合がありますので、そういうものには、こうしたらいいと教えたりしております。

○牟田座長 どうぞ。

○安田室長 先生方から大変貴重な意見をいただきまして、ありがとうございます。いろいろと御指摘があった中で、一つは多様性の問題ですけれども、資料にもありますように、ある程度は多様性の確保の前進は見られているのかなと思います。以前からこの事業を見ていますと、基本的な属性が、女子、大学生、首都圏だったのです。日本の中でのダイバーシティはもう少しなければいけないねということで、国の税金を使っているわけです。

から、特に地方の方々、それと社会人の方々、男女はそれぞれどちらでもいいのですけれども、ちなみにこの間の東南アジア青年の船は珍しく男子のほうが多くて、なぜそうだったのかはよくわからないのですけれども、もっともっと多様性を高めていかなければならないと思います。

その中で、去年も今回のグローバルリーダー事業に当たりまして、各経済団体、労働団体あるいは公務員関係の団体も含めて、いろいろ呼びかけはさせていただきました。それまでは十分ではなかったのかなと思います。

それと、先ほど何人かの先生から御指摘があったように、組織に属していない方ですね。アーティストとか、あるいは自分で農業を自営しているという人もいらっしゃるだろうし、そういった方々の参加を促す方法は何かないかなというのは、確かにもう少し考えてみたいかなと思います。

参加者の属性が偏っていますのも、やはり口コミで広がっているという感じが強いですね。毎年参加してくれる大学とか、そういうのは先輩・後輩から、この事業はいいよ、おもしろいよという形で紹介していただいているというのが結構多いので、そういう意味では、今、どうやるかというのにすぐ答えを持っているわけではないのですけれども、やはりSNSを含めたネットでの広報というのは、お金もかかりませんし、必要かなと思っています。

例えば来週の日曜日、東南アジア青年の船の報告会ということで、今年度参加した青年たちが主催して、オリンピックセンターで、このような活動をやってきましたと御紹介する機会があるのです。まだ検討途中ですけれども、例えばこの報告会をビデオ撮影して、後でストリーミングで誰でも見られるような形にしていってもいいのかなとも思いますし、SNSも、例えば外国への発信ということになれば、フェイスブックとかツイッターとかだけでなく、インスタグラムなどもいろいろ考えなければいけないのかなと思っていますところでございます。

広報については、もうちょっと何とかならないのかなというのは常々思っています。ただ、参加青年がライブで発信するというのは功罪いろいろありそうだなと思います。確かにかなりはみ出してしまう場合もあるだろうと思いますし、もう一つは、船の事業の良さというのは、フェイス・トゥ・フェイスの関係以外のコミュニケーションを遮断しているという部分にもあり、要するに、ネットとかスマホから離れて直接コミュニケーションをとるという局面を長期間持つことは、今の青年たちだとかなかないと思われれます。帰港すると、みんな一生懸命スマホを使っていますけれども、そういった面でもどうあるべきか、検討をさせていただく必要があると思います。

あと感じましたのは、ERIKOさんからの、他国のプレゼンを、というのも非常におもしろいアイデアかなという気がいたしました。それぞれの国が他国からどう見られているのかなということ、あるいはどういった形でステレオタイプに理解されているのかなということもわかったりするので、非常に刺激になるのかもしれないなと思いましたので、どうい

う形で取り入れられるのか、まだアイデアがないですけれども、一つの研修の中身のあり方としては、大変おもしろいのではないかと感じました。

また、国益あるいは外交的な意味合いについても御指摘をいただきましたけれども、まさにそのとおりだと思います。税金を使ってやる以上は、個々の青年の成長というのは当然必要であり、目指すところですが、そのことをもってして国や社会にどう貢献してくれるのかということも、当然求められるところがございますので、その点は常々意識させるようにしていかなければならないと思っていますし、また、大橋さんのところを中心にやっていただいている事後活動というものも、そうした意味からもっともっとフォローアップをしていかなければいけないところだと思います。

あとは、外国青年をどういうものと捉えるか。これは、私個人としては余り考えたことがなくて、また、国によっては国がコントロールしているのでなかなか私どもではコントロールしきれない部分もあるやに聞いていますけれども、どのような外国青年との話あるいは接触、交流が刺激になったのかということもフォローしてみるべきだろうと感じました。

ただ、外国青年は、この船に乗る前にも日本に来て研修をやって、地方のプログラムもやっておりますように、外国青年に日本を理解してもらい、あるいは日本のシンパになっていただくということも非常に有意義なことだろうと思います。日本青年を磨くと同時に、外国青年もそういった意味で磨かれるといいですか、日本を好きになっていただく、理解を深めていただく。それが長い意味での日本にとってのアセットになってくるのだろうと思いますので、そういった形で求められる外国青年像を考えてみたいと思いました。

ありがとうございます。

○牟田座長 ありがとうございます。

それでは、まだ時間がございますので、自由に御発言をしてください。何でも結構でございます。

どうぞ。

○池上委員 今年度、平成27年度のプログラムの参加国なのですけれども、オーストラリア、バーレーン、チリ、インド、メキシコ、ニュージーランド、ロシア、スリランカ、タンザニア、アラブと日本なのですね。日本を入れて11カ国なのです。その中で、OECDのメンバー国が5カ国あるのですよ。そうすると、11分の5がいわゆる先進国ということになります。インド、スリランカに寄港する、プログラムがインド、スリランカでの視察ということになると、この2カ国を外せないということになる。でも、私的にはですけれども、11分の5が先進国扱いになるということよりは、もう少し途上国の数をふやしていただけたらうれしいと思います。

というのは、日本の若い人たちがこれからどういう国際社会の中で生きていかなければいけないかということ、2050年の先を見たときには、途上国の力とか人口の数というのが、今よりもずっと大きくなっていくわけです。日本の外交を考えると、先進国とはある程度

の関係性ができている。そうすると、今の若い人にどこで人間関係を強く持ってほしいかという、日本の青年が最近は行かなくなった開発途上国です。途上国の人たちを身近に感じる機会として、なるべく参加国は開発途上国から選んでいただけるといいかなと思いました。

いかがでしょうか。

○牟田座長 これは国の数がこのくらいしかないというのは、要するに、募集をする都合上か何かなのですか。

○金原参事官補佐 全体の外国人参加青年をどの程度招聘するかというのは、予算規模の都合上で上限があります。その中で、1カ国からどれぐらいの青年がいるかということと、どれぐらいの国があるべきかという2点で検討をいたしまして、ことしの場合は1カ国で12人いて、10カ国ぐらいあれば大体地域的なバランスがとれると。いろいろな大陸から招聘できるという観点で、10カ国12人ということにしております。

○池上委員 私が一番引っかかったのは、オーストラリアとニュージーランドの両方が来ている。一方でアフリカが1カ国です。

○安田室長 その点に関して申し上げますと、まだ決定をしているわけではないですけども、このグローバルリーダーの寄港国を、日本から見て西側と東側で交代で行こうかなと考えていまして、今回の場合にはインド、スリランカにして、次は多分、オーストラリア、ニュージーランドあるいは太平洋諸国あたりということもありまして。

○池上委員 メキシコまでは行かないのですか。

○安田室長 お金と時間があればということなのですが、今のところはそういった考え方で財政当局にも説明をして、理解を得て、こういう事業になっているというところがございまして。とりあえず2回やってみれば、また次の考え方も出てくるかと思っておりますけれども、そういった意味で、オーストラリア、ニュージーランドあたりも、次ということもにらんで入っているという要素もございまして。

あと、どうしてもそれぞれの国の政府がこういったことに関心を持っていただくところでないと、なかなかこちら意思疎通ができない。少しずつ対象国を変えていくということはできるかと思っておりますけれども、一遍にいろいろな国と新たにやろうと思うと、やはり我々のほうもそこまでの労力をかけづらい部分があるのも事実で、ただ、ちょっとずつ変える努力というのは、これからもしていこうと思っております。

現に、例えばこれまでの交流の成果かもしれませんが、ある国の大使から、ぜひ自分の国の青年を参加させてほしいという話を受けることもございますし、新たなきっかけがあれば、ぜひそういった面での多様性という部分も努力していきたいと思っております。

○ERIKO委員 よろしいですか。

○牟田座長 どうぞ。

○ERIKO委員 例えば同じ国の中でも、チリとかメキシコで船に乗られる方は、多分白人の方だと思っておりますけれども、チリの中でも、例えばマプチェの先住民族だったり、メキシ

コだと全く違う先住民の方とかも生活をしているわけで、自分の価値観をブレイクスルーするには、やはり全く違った価値観に触れるというのもすごく大切だと思うのですね。なので、代表で出てこられる方は白人系の方が非常に多いのではないかなと思うのですけれども、そうでない独自の文化を持った人たちにわざと乗っていただくというのも、同じ国の中でもあるのではないか。例えばニュージーランドだったらマオリの血を引いている方だったり、そういう工夫次第ということもあるのではないかと思います。

○牟田座長 どうぞ。

○田中参事官 各国も国内での多様性を重視している傾向がございまして、白人が多い国でもあえて少数派の人を乗せる。ニュージーランドですと、必ずマオリの人を乗せるとか、そのように各国は配慮をしているようです。また、南米ですと、あえて日系人を入れるとか、そういったことを各国政府が行っています。

○池上委員 先ほど安田さんがおっしゃられたオーストラリア、ニュージーランドというのは、寄港国としては確かに近くていいのですが、もし、南に行くのであれば、オーストラリアかニュージーランド、プラス、トンガとか、バヌアツとか、そういう組み合わせにしていきたいのです。

○安田室長 実はそう考えていまして、今、オーストラリア、ニュージーランドの両方を一遍に行くという考え方ではないです。来年度はニュージーランドとフィジーです。

○大橋副会長 少し経緯を御説明してもいいですか。

○牟田座長 どうぞ。

○大橋副会長 30年知っている身から、少しお話をさせていただいてもいいでしょうか。

今回の国がたまたまオーストラリアですとかニュージーランド、ロシア連邦なども入っております、比較的大きな国が多いのですけれども、これまでの世界青年の船の考え方というのは、どちらかといえばアフリカの国ですとか、中東の国ですとか、南西アジアの国々を選んでおりました。ただ、実際上アフリカの国々は、今、国情の関係で、実はアフリカからはケニアとタンザニアしか入れられないような状況になっている。

というのは、日本大使館を通じての青年の選考ですとか、そういう状況が悪くなっているという意味で、全くできないことはないと思いますが、かつて予算が多かった時代には16カ国の国々から呼んでいた時代もありました。1カ国の人数が9名という時代もあったのですが、実は1カ国当たりの人数が少なくなりますと、グループの中に全部の国が入ることができないのですね。今、なぜ12名になっているかといいますと、日本を含めて11カ国ですので、レター・グループと言うのですが、生活グループで全部の国を混ぜたときに全部の国が入るようにできるのですけれども、かつて14カ国ですとか16カ国を呼んでいた時代には、いない国が出てしまうのですね。そういう意味で、人数はある程度の規模にすべきという考え方に至ったという経緯がございまして。

それから、当初は世界中のさまざまな国々から呼んでいたのですけれども、その後、途中からネットワークを重視するという意味で、事後の活動組織がきちんと立ち上がってい

るかかどうかということが、ある程度の国の選考基準になってきたという経緯があります。

実際には、国が決定される時は、当然日本政府がやっていますので、外務省との調整がされているということがあるようです。この事後活動組織が発達した国を中心に選ぶようになった経緯は、やはりこれだけの事業をやっておりますので、事業が終わった後の効果を検証したり、外国人を含めてなのですけれども、ネットワーク化をしないと事業をやっている価値がないのではないかという論議が世界船の中盤ぐらいのころからなされまして、今までに国がある程度絞られてきたという経緯がありました。

過去の経緯という意味で御説明をさせていただきました。

あと、今年はたまたまオーストラリア、ニュージーランドが入っているのですけれども、いつもは島の国々が選定されております。失礼しました。

○池上委員 いいですか。

○牟田座長 どうぞ。

○池上委員 11カ国にするということは、広げないで、少し絞り込んでネットワークがあるところというのはよくわかります。でも、最初からネットワークがあるわけではないので、ネットワークがある程度できたところでその国を離して、次にネットワークをつくる国というように、日本がプライオリティーをもって、どういう国と関係を持ちたいと思っているかということですよ。そこは政策レベルの話になってくると思うのです。

そうすると、アフリカですと、安全でかつネットワークができている可能性がある国というのは、例えばザンビアとか、エチオピアとか、ガーナとか、セネガルがありますね。この辺の国は政治的に安定している。かつ、大使館もしっかりしているのではないかという感じはするのです。タンザニアもケニアもいいと思いますけれども、東の国だけではなくて、西アフリカも含めた寄港地を、どこかの段階で少し考えてもいいのではないかと思います。

○井上委員 よろしいですか。

○牟田座長 どうぞ。

○井上委員 一応経済団体の人間なので、例えばTPPというのを考えてみると、もちろん大国であるアメリカ中心ではあったのだけれども、当然OECDに加盟していない国々も合意に至ったわけですね。ですから、今、池上先生からお話があったように、やはり国際社会の中に入ってきて、何かの枠組みの中に入ろうと意欲的に考えているような国々から参加者を見つけてくる。同じ土俵で話し合いをして、同じ条件で何かをつくり出そうとしている、そういう国の人々を見つけてくることは有益ではないかと思います。そこに内閣府でやる意義があるのではないかという感じがしますね。

そういう観点から言うと、御専門の方の前で言うのも恥ずかしいのですが、今、経済界の関心というのは、やはり中東の問題ですね。原油価格が下がることで、今、何となく世界経済がシュリンクしていったような状況に陥っているわけですけれども、例えば結節点になっているトルコだとか、難民が押し寄せて、その入り口になってしまってい

るギリシャだとか、それが東欧に流れて、最終的には西側に流れるわけですけども、ハンガリーだとか、その経由地になっている国々ですね。そういうリアルな現実を見ている青年たちと日本の若い人たちが出会う場合は、なかなかないのではないかなと思うのです。

参加者の国を見ると、やはり何となく太平洋諸国という感じがします。私が申し上げた、宗教上、異なる国々の隣り合う地域、西側と東側の結節点になるような地域の人々を何とか入れてくると、おもしろいプログラムができそうだと思います。

経済界は、西欧、あるいは中東で起きていることが、実は比較的経済実態がいいはずの日本に影響を及ぼしているという何とも被害者意識的なところがあるものですから、なぜそれが起きてしまっているのか、ISだけの問題ではないと思うのですが、そういうことを理解できるようなプログラムができたら、おもしろいと思います。

○池上委員 かなりアップデートな話ですね。

○安田室長 いいですか。

○牟田座長 どうぞ。

○安田室長 まさに今、池上先生からアップデートというお話がありましたけれども、余り短期的な外交経済的な思惑でやることは、むしろ内閣府の事業としては少しふさわしくないのかなという観点があって、それは外務省や経産省がやればいいことだ、それとどこが違うのという話にもなりかねないので、特に青年たちの交流ということで、これからの長い人生を日本のリーダーとして背負っていただくために、今、何を勉強しておくこと、どういう交流をしておくことが将来のためにも役に立つのかということで、かなり長いスパンで考えていきたいと。

もちろんそういった中で、今、御示唆をいただいたような観点は、いろいろな意味で取り入れていかなければいけないと思いますけれども、基本的な内閣府のスタンスとしては、今申し上げたような考え方で交流事業をやっているということも御理解をいただければと思います。

○牟田座長 竹尾委員どうぞ。

○竹尾委員 外国の青年の選び方とか国については、確かにもう少し別の角度からあったほうがいいのではないかということで、私自身もネットワーク化ということとか、過去の蓄積ということを大事にしながらという側面がすごくあるので、新しいものに踏み込むのはなかなか難しいこともよくわかりますが、そこをもう少しいろいろ、アフリカを増やせとか、あるいは中部ヨーロッパとか、こういうところでも非常に動いている世界をビビットに発信してくれるような、そして、それを求めている政府とかがあると思いますから、それをちょっと開発するということがスケジュールに入れていただくことがよろしいのではないかと思います。それは外務省との関係ですとか、日本政府の事業ですから、非常に難しいプロセスがあると思いますけれども、案外バイパスして、すっとできる場合もありますのでね。

もう一つは、先ほどもちょっと出ましたけれども、寄港地とか参加国について、実は割

かし知らないまま行ってしまうということが多いように思いました。今はプログラムが改善されているのかもしれませんが、ナショナルプレゼンテーションは、ある意味での異文化理解とか、そういう点では非常に衝撃的でクオリティーも高いのですけれども、それを超えてもっとその国の置かれている状況の全体とか、そういうことはしゃべっているうちにわかることがありますけれども、体系的にはなかなか把握しにくいのですね。そういうことが、例えば今回でもスリランカとかインドに行くときに、こういう国をどのように捉えて、なぜそこにいるのかとか、社会環境とか歴史とか、そういうことについてインテンシブに共有できるようなことがプログラムの中に入ると、もっとすばらしいのではないかという感想を私は持ちました。

○事務局 現在、参加青年に対して、行く国について学習する機会はあるのですが、参加国全てについて詳細まで必要な知識を身につけるといところ、さらにそれを参加青年に対してアウトプットをさせるというところまでは、十分に行っていないところがあると思いますので、今後、ほかの参加国に対して学んで、それをさらにアウトプット、何らかの形で出していくといったことをプログラムの中に盛り込むということも、検討をしてみたいと思います。

○牟田座長 大橋さん。

○大橋事務局長 今、27年度と28年度の話になっているのですが、特に「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の場合は、関係国がある程度広がっておりますので、2年に一度または3年に一度の招聘国という形になっておりますので、ある程度の全体を先生方にお示しされたほうがよろしいのではないのでしょうか。

あと、実際上は航空機の事業ですとか、そことのバランスで全体の地域バランスを調整していますので、実は内閣府が選んでいる地域というのはかなり幅広い。それから、初めての新しいときは、航空機の招聘だけで呼んでみるとか、いろいろなトライはされているので、過去3年ぐらいの招聘国ですとか考え方、全体をお見せして、その上で「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」にふさわしい国はどのような国かという形での御意見をいただいたほうが、先生方も全体像が見えて、意見をおっしゃっていただきやすいのではないのでしょうかと思いました。

○金原参事官補佐 かしこまりました。次回の検討会の際に資料を御用意いたします。

○牟田座長 よろしく願いいたします。

そのほかに、何でも結構でございます。

○安田審議官 よろしいですか。

○牟田座長 どうぞ。

○安田審議官 それこそ大橋副会長の領域でもありますけれども、事後活動を各国で持続的に展開をしていくためには、時々招聘なり派遣なりという形で空気を入れると言ったら変な言い方なのですが、ずっと途絶えてしまうと事後活動も枯れ気味になってしまうという部分もありますので、そういった意味で特定の国が反復してくるとい部分もあ

るにはあるということでございます。

ただ、そうは言っても、やはりおっしゃるように新しい国を新しい視点から開発していくといたしますか、開拓していくということも必要だと思います。どうしても、やりやすい国とやってしまうということになりかねない部分もあろうかと思っておりますので、そういった努力はこれからも続けていきたいと思うところでございます。

もう一つ、池上先生でしたか、年齢が35歳までのほうがいいのではないかという御指摘もありまして、私自身はそれを検討したことはなかったのですが、検討してもいいのかもしれないと個人的には思いました。いろいろなところで、例えば地方公務員も、最近採用の年齢枠を上げたりしておるところですし、35歳ぐらいまで採るのではないのでしょうか。現在やっているプログラムの年齢幅の中で、社会人とか、多様な方々に来ていただけているのであれば、それでも構わないのかもしれないけれども、もし、多様性の確保とか、あるいは日本の青年の他国と比較しての成熟度とか、そういった問題などでいかなものかということがあるとするならば、年齢の上限も少し検討してみてもいいのかなと。個人的な感想で、まだ組織として検討したことはないのですが、思った次第です。

○牟田座長 そのほかにいかがでございましょうか。

どうぞ。

○田中参事官 今日、いろいろな御意見をいただいて、実際に船に乗った経験からも、皆様の御指摘は心に響くものだったと思います。

特に池上先生から、国連のSDGsのお話がありましたけれども、私が乗った際は、国連のミレニアムの目標が掲げられていたときで、途上国のリーダーがそれをいかに重視しているかというのは、よく分かりました。それは途上国の青年たちがマルチで乗ってきているからこそ分かったことで、世界は欧米中心で回っていますが、船に乗って初めて別の世界の姿が見えてきたという感じがいたしました。こういった国連のテーマを取り上げるというのは、非常に重要だと思いました。

また、密度の濃さがこの船の事業の特徴ではないかと思いました。他にも国際交流は多いと思うのですが、一つの船に集められて、それでディスカッションをするしかない、外を出歩けない環境であることが、何かミニ地球をつくっているような感じであり、非常に密度の濃いコミュニケーションになる。これは船を使ったことでできたのだと思うところで、そこが決定的に他のプログラムとは違うと感じます。

それから、ERIKO先生の芸術の関係ですが、船に乗るまでは、ナショナルプレゼンテーションで各国の民族芸能とかを披露するのにどのような意味があるのかなと思っていたのですが、そういうものを見ると、その国のアイデンティティがわかります。各国の青年もロックだとかラップだとかが好きなのですが、船に乗ってあえてそういうことをやると、自分たちがどういう存在なのかということを確認するようです。芸術性が結構重要だというのは、実感したところです。

御提案の中で、各国のナショナルプレゼンテーションの中に日本人が少し関わったほうが良いのではないかという点も、全く同感です。ある国が、国の誇りとして新型兵器をナショナルプレゼンテーションで出してきたことがあり、科学技術や軍事力で、彼らの自慢するところだったのでしょうが、それに対して、日本人青年からは、いや、それはどうなのか、平和の観点でふさわしくないのではないかといった意見も出て、それはまさに国際交流で初めて得られる体験です。ナショナルプレゼンテーションによりかかわっていくと、より深いコミュニケーションが引き出せるのではないのかと感じました。

竹尾先生から、フェイスブックの話が出ましたが、昔は写真を送るだけでも大変だったのですが、今はあつという間に広まります。期ごとにフェイスブックを使って交流をやっているようですので、これをどう生かしていけるかが課題と思いました。

牟田先生の磨き砂の話がありましたが、一流と言われる大学院の公共政策大学院を出た青年だったのですけれども、こんなに自分ができないとは思わなかった、世界を知らなかった、途上国の青年たちがこんなにできるとは思わなかったと言っておりまして、そういう経験をさせてあげられたのは非常に良かったと思います。

外国からの参加青年の中にはお医者さんが何人もいたり、それぞれの国の社会階層で一番上の人たちが集まってきていますので、そういう青年たちと、日本の青年はごく普通の青年ですけれども、そういう青年と交流させられているというのは、非常に意味があると思ったところです。

最後、井上先生からトルコかギリシャという話がありましたけれども、トルコを招へいた時は、親日的で良かったです。ギリシャも招へいた時がありますが、ちょうど通貨危機のときだったのですけれども、そういうひどい状況だけれども、自分たちは国をどう思っているのかという発表がありまして、非常に感動的な内容でした。そういった国々を呼ぶことの意味は非常に大きいと感じたところです。

○ERIKO委員 よろしいですか。

○牟田座長 どうぞ。

○ERIKO委員 今、お話を聞いていて思ったのですけれども、やはり全然違う文化だったり、そういうものは、日本でずっと生活をしている人にとって、一番初めは興味だと思うのですね。どうして興味を持つかという、やはり共感性だと思うのです。

私がいろいろなところに行ってすごく共感を抱くのは、その国にある日本というものが、私がぐっと近づいた一つの要因でして、例えばODAでどのようにその国で支援をしているかだったり、その国で有名な日本人だったり、昔の外交関係でどのように日本とかかわったか、日本が助けてもらったかということをや予備知識として少しでも入れておくと、その国にぐっと近づいて、心の距離感が全く違ってくるのではないかと思います。

例えば私がパラグアイに行ったときに、初めて空港において、「ようこそ」と日本語で書いてあるのですけれども、それだけでも、どうして日本語で書いてあるのだろうと思ったりしますね。すごくちょっとしたことだと思うのですけれども、そういったことがコミ

コミュニケーションが円滑になっていく要素なのではないかと思っています。

○田中参事官 いいですか。

○牟田座長 どうぞ。

○田中参事官 その関連ですが、トンガでは、この船の事業でつくられた日本のイメージが非常に強いらしく、日本人は英語がよく話せる人たちだというイメージがあるようです。それは船の事業で参加した経験がそのようなことで、日本人には非常に親切で頼りになる人たちだというイメージもあるようです。

○牟田座長 他にいかがでございましょうか。

お話を聞きながら、大学教育で何が大事かということで、よく寮が大事だという話がありますね。大学によっては全寮制にしなければいけないのだという話もあると思うのですが、この青年の船というのはミニ寮みたいなもので、1年間の寮生活を1カ月ぐらいで凝縮してやっているようなところもあると思うのですね。やはり田舎から出てきた人がそういうところでいろいろな人と交わることによって自分が伸びていくということがあるのではないかと思うのですが、そういう意味で、今回1カ月の船での研修ができるようになったというのは、本当に非常にいいことだと思うので、ぜひこの効果をきちんと検証して、これが続けられていくようなことになるとありがたいなと思っています。

安田室長どうぞ。

○安田室長 先ほども少し話が出ていましたけれども、今回の事業で初めて新たに予算を取ったのが免除枠というものですけれども、いろいろな人に機会を提供するという意味で、このプログラムの内容にしてみれば負担の額も安いと言えるかもしれませんが、それでも30万ほど負担しなければなりませんので、そういった意味で、能力、意欲はあってもなかなかそれだけの負担が難しい人にもチャンスをと、ということで、10名の枠を設けたのですけれども、この点も、ぜひ今後とも続けていきたいし、できれば拡大したいという気持ちを持っていますので、この点についても忌憚のない御評価をいただければありがたいと思います。

○牟田座長 これは大変いい試みだと思うのですが、実際にこの枠は使われましたか。

○金原参事官補佐 はい。10名使っています。

○牟田座長 そうですね。どういう条件の方にこの枠を使われるのでしょうか。

○金原参事官補佐 これは、おおむね各国立大学で学費免除を受けられるような所得水準を想定して、同じような基準でつくっています。

○池上委員 実際にもらった人、それを受けた人はどういう感じですか。地方の人が多いと書いてありますけれども。

○金原参事官補佐 実際に大学に行っている大学生で、大学から学費免除を受けている人と、あとは他の基準をクリアして参加した青年がおりまして、そこは基準に沿って選んだわけですが、結果としては地方の出身者が多かったところがございます。

○池上委員 学生さんが多いのですか。社会人が多いのですか。

- 事務局 今、手元に細かい数字はないのですけれども、学生が中心です。
- 池上委員 もしかすると新しい突破口になるかなと思うのは、大学は出ました、または大学を中退しましたという若い人たちで、今、定職がない人たちが、もし、こういう船のプログラムに参加して、こういった補助を受けられるとすると、新しい視点が彼らによってもたらされるチャンスが出てくるのかなという気がするのですけれども。そういう人がもっているかどうか、次回のときに教えていただけますか。
- 金原参事官補佐 はい。
- 竹尾委員 いいですか。
- 牟田座長 どうぞ。
- 竹尾委員 それにも関連するのですけれども、今度、外国航路に戻って南下した人たちが、一体どういうバックグラウンドの人たちで、結果的には地方の人がちょっと増えたとかそういうことですが、個人情報にかかわりますので、非常にデリケートな側面もあると思いますけれども、どういう背景を持ってきたのかということは、アンケートには必ずしも出ない、もう少し細かい情報があるかと思うのですね。そういうビッグデータになるのかもしれませんが、全部とは思いませんけれども、そういうアンケートとはちょっと違うような参加者のデータも可能な範囲で拝見できればと思います。
- 池上委員 個人名を出さずに。
- 牟田座長 統計だけなら。
- 池上委員 統計までいくと全然問題ないでしょう。
- 竹尾委員 いろいろなやり方があると思います。特定できないような形で、例えば大学ですとか、何県とか、そういうカテゴリーでわかると、例えば過去2年に日本でやったものと変わってきたのかどうか、そういうことも見たいと思います。
- 池上委員 先ほどの参加費免除の10人の方に丸をつけておいていただくとか。平均でやってしまうと一人一人やらないから出ないのか。
- 牟田座長 平均でもできるのではないですか。
- 池上委員 この辺とかとの指摘はできますか。
- ERIKO委員 もし、可能であれば、その参加者の方に、自分が参加する前と参加した後の変化というか、感動するようなものがあって船に乗ると随分変わると思うので、そういうものを書いていただいて、それを読んだ人に、もしかしたら自分にもできるかもしれないと思ってもらえるかもしれないので、広報にも使えるのではないかと思います。
- 池上委員 1年前か何か、やりました。
- ERIKO委員 そうなのですか。読みたい。
- 牟田座長 今回もアンケートに入っているでしょう。
- ERIKO委員 なるほど。
- 竹尾委員 ただ、もっと書き込んで、もっと使えるようなものに。
- ERIKO委員 そうですね。きれいな写真と一緒に。

○池上委員 去年やりましたね。作文ではないけれども、もうちょっと文章を長くしてもらって。

○安田室長 物語性のあるようなものに。

○ERIKO委員 それで、ちょっとシェアしたくなるような話につくって、みんなに自然に流れていくような形がとれたらいいのではないかなど。

○池上委員 みんな考えることは同じですね。

○ERIKO委員 そうですね。

○牟田座長 何か簡単な検索ですぐに引っかかるみたいなものがないね。何かで調べたらすぐにそれが出てきたとかね。

○ERIKO委員 そうですね。

○池上委員 検索で上に出てくるためには、少しお金がかかるかも。

○牟田座長 何かやりようで上に出てくるかと。

○池上委員 そうなのですよ。みんながアクセスすれば。

○牟田座長 そうなんですか。

○ERIKO委員 それぐらいの感動ストーリーを。

○池上委員 あと、思いつきで申しわけないのですが、例えば今、アンケートをとっていますが、今の参加青年に、次の船の参加者の可能性として友達を5人紹介してもらうとか、そういう輪を広げる。口コミというお話が何回か出てきたので、そういうことをもうちょっと体系的にしてもいいのかなと思いました。それが有効かどうかはまた別ですけど。私も高校で留学したのですが、それは友達のお兄さんが留学から帰ってきて、それを聞いて私も留学してみたいと思ったのです。やはりそういうものは効果があります。

○牟田座長 次の募集をするときに、去年行った人に、知人5人にこのメールを送るようお願いする。

○池上委員 レコメンドすると。

○牟田座長 そうなのはいいかもしれませんね。

○池上委員 そうすると倍率が高くなって。

○竹尾委員 推薦状か何かを出すようなシステムでいいと思うけれどもね。既参加青年の推薦状を添えても結構だと思います。

○牟田座長 いいやり方ですね。

よろしゅうございましょうか。そろそろ時間でございます。

本日の意見交換は、ここまでとしたいと思います。各委員の御意見を踏まえました分析、資料作成につきましては、次回までに事務局の内閣府が検討をしたいと思います。

それでは、最後に事務局から、今後の日程等につきまして説明をお願いしたいと思います。

○事務局 5月12日の3時から5時で、次は5月27日の午後3時から午後5時でお願いしたいと思います。

○牟田座長 ありがとうございました。

以上でよろしゅうございましょうか。

(「はい」と声あり)

○牟田座長 では、本日の議題は以上でございます。お忙しいところ、本日はありがとうございました。